

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

May
2021

5

仕立屋のスピリット





仕立屋のスピリット

TAYLOR

今回は衣料品に関連する二つの仕事場を紹介したい。
ひとつは学生衣料の老舗、もうひとつは新進気鋭のジーンズ工房。
一見対照的な両者から「仕立屋スピリット」が見えてくる。

小さな町のセーラー服メーカー

常滑市荻屋町は、町を縦貫する県道252号、通称「西浦街道」沿いに何軒かの店が並んでおり、小さいながらも商店街らしさを感じさせる町だ。その町並みの中ほどに「永田被服」という店がある。

デイスプレーには学生服とセーラー服を着せたマネキンが立っており、どこか懐かしい昔ながらの店の雰囲気漂わせている。店内には体操着、黄色の学童帽子や赤白帽子、上履き、白のYシャツなど、小・中・高校生の必需品が並ぶ。どの町にも必ず一軒はありそうな、学校専門の衣料品店である。

その店構えからは想像しづらいのだが、かつてはセーラー服の製造を手掛けていたという。常滑市内のみならず知多半島の多くの学校で永田被服製の制服が着用された時代があり、多くの人が知らず知らずのうちに世話になっていた店なのだ。

店を切り盛りしてきたのは永田眞知子さんと母のみゆきさんで、夫の壽ひささんは教員を定年退職した後から店を手伝うようになった。

創業は大正六年（一九一七）頃というから、百年を超える老舗だ。創業者は、明治二十八年（一八九五）生まれの永田源造で眞知子さんの祖父にあたる。当初は足袋やステテコを作っていたという。

学生衣料の専門店になるのは、眞知子さんの父・邦雄が二代目として店を継いだ後で、昭和三十年代のこと。終戦後のベビーブームに生まれたいわゆる「団塊の世代」の子供たちが中学、高校に進学する頃で、児童・生徒数が上昇一途だった高度成長期の真っ只中だ。当時、衣料品店は常滑市内に何軒もあったが、学生衣料一本に絞っていたのは永田被服だけだった。

最大の特徴がセーラー服の自社製造だった。学生服は全国的にほぼ同一規格のものが使用されているため、衣料品店は大手メーカーの量産品を仕入れて販売するのが一般的である。しかし、セーラー服は学校ごと、地域ごとにデザインが異なるので量産化は難しい。そこで、セーラー服は各地域の仕立屋の製造が主流になる。

もちろんどこの仕立屋でも作れるものではない。愛知県でも数え

るほどしかなく、知多半島では永田被服が唯一だった。自身も職人であった二代目は、何人もの縫製職人を雇い入れて製造体制を整える。永田被服のセーラー服は品質の良さに定評があり、地元はもちろん尾張北部や西三河でも広く使われた。常滑では、昭和五十一年（一九七六）に開校した常滑北高校（現常滑高校）の指定店にもなった。

作業場は今も生きている

三代目にあたる眞知子さんが子供の頃は、祖父がやっていたステテコ製造のイメージがまだ地元で強かったせいで、同級生から「パンツ屋の娘」などからかわれたこともあったとか。しかし、真摯に仕事に取り組み両親と祖父の姿を見て育ち、自然と家業に入った。高校卒業後は常滑にあった鯉江洋裁学校に入り技術を学んだ。

セーラー服は職人が製図から起こし、生地を大手毛織生地メーカーの日本毛織（ニッケ）から仕入れ、作業場で一着一着仕立て上げた。最盛期には七人ほどの職人を

抱えており、シーズンともなれば目の回るような忙しさだった。「何しろ数が多すぎて、入学式当日に配達したこともありました。保護者も生徒さんも気が気でなかったでしょうね。あの時のお客さん、ごめんさい」と当時を振り返る。

昔と今とではセーラー服の素材もデザインも随分異なっている。たとえば生地。今はウールとポリエステル（ポリエス）の混紡が使われることが多いが、かつてはウール100%のセーラー服も多く、それだと袖直しがしやすかったという。また、昔の主流はセーラー服に「ダーツ」（服を身体にフィットさせるために生地を立体的に縫う技法のこと）を施さないもの。そのタイプは襟が綺麗で、軽くて暖かく、均整の取れた体形の子が着ると格好良かったとか。「昔は子供のヒップに合わせてスカートのプリーツの数を変えるということもしていました。そうするとプリーツがきれいに出るんです」と眞知子さんは話す。成長期の子供一人ひとりに合わせたきめ細かな対応が、町の仕立屋の真骨頂だ。

道路を挟んだ店の向かいには、

往時のままの作業場があるというので見せてもらった。ガラガラと引き戸を開けて中に入ると三和土（た）の土間で、その横には作り付けの大きな陳列棚がある。かつては商品見本が飾られていたのだろう。その前には年代物の足踏みミシンが一台置いてあり、黒く美しい光沢を放っている。

土間の左手には板敷きの作業場が広がり、分厚くて大きな二つの作業台が床の三分の二ほどを占めている。道路側の窓に面して工業用ミシンが三台置いてあり、作業場の縁に腰かけてミシンを踏めるようになってる。

その作業場の奥には、職人の中村吉子さんが黙々と学生服の袖直しに勤しんでいた。中村さんは昭和四十二年（一九六六）から勤務しているこの道約五十五年の大ベテラン。実は永田被服では仕立て仕事を完全に閉じたわけではなく、既製品のサイズにないスカートの製造や、サイズ直しは今も請け負っているのである。三台のミシンはいずれも現役で、うち一台には新しい糸がセッティングされている。

常滑で唯一のセーラー服メー



カーの伝統は、今なお生き続けている。
 いる。

祖父の紳士服と孫のジーンズと

永田被服のある苧屋の北隣の古
 場町にも、かつて仕立屋があった。
 店の名は中沢洋服店。知多半島南
 部では珍しい紳士服専門の仕立屋
 だ。仕立て職人の中沢巖が経営
 し、平成の始め頃まで営業してい
 た。

巖は十五歳のときに上京し、浅
 草のテラーで十五年間勤務した
 経験を持つ。東京で結婚したが、戦
 争の足音が聞こえてきた昭和十年
 (一九三三)に郷里に帰り、その後、
 自身の店を開いたという。巖は八
 十歳を過ぎるまで仕事をしていた
 が、そこまで続いたのは、東京仕込
 みの確かな腕が多くのお客様の信頼
 を集めていたからだろう。

経営的な連続性はないが、その
 系譜に連なる工房が常滑の中心部
 近くにある。その名を「ミシンア
 デイクト」という。工房の主は赤井
 隆行さんで、巖は母方の祖父にな
 る。赤井さんが作っているのは紳士
 服ではなく、ジーンズ。知多半島は



もちろん、愛知県内でもジーンズを
 主力とするファッショ工房はほと
 んど聞いたことがなく、希少な存
 在である。

ミシンアデイクトがあるのはバ
 ロー常滑店東側の高台。母屋の離
 れが工房になっており、中は大き
 な作業台、工業用ミシンや小型のミ
 シン、その周りを生地、糸、部品が
 埋め尽くす。ジーンズだけでなく、
 靴や帽子もある。ここでは赤井さ
 んが一人で仕事をしているが、活気
 が感じられる空間だ。ちなみに赤
 井家では、昭和五十年頃まで輸出
 陶器や置き物の絵付けを家業と
 しており、この工房もかつては絵付
 けの作業場だったとか。その名残
 で、床には塗料の跡が付いたまま
 で、アメリカ向けの天使の置物も残
 されている。

母方はテラー、父方は絵付け
 師という家系も影響しているのだ
 ろう、赤井さんは昔からの作り
 が好きで、若い時には家具職人を
 したり、甥っ子や姪っ子のために服
 や靴を手作りしていた。布製品作
 りの趣味が高じて、平成十七年(二
 〇〇五)にふとした縁からやきも
 の散歩道で帽子や靴のリメイクを



する。移動店舗的な活動をミシン
 アデイクト名義で始めたところ、地
 元の人にも観光客にも好評を博
 した。そこで、衣料系クラフトを制
 作する本格的な工房を立ち上げ、
 自分のブランドの核となるアイテム
 として、昔から好きだったアメリカ
 ンカルチャーのシンボルであるジーン
 ズの制作に取り組み始めた。

「ミシンそのものは子供の頃から
 触っていたので親しみはあったので
 すが、正直なところ、祖父の仕事を
 意識したことはそんなになかった
 んです。しかし職業として携わり
 と、次第に自分の中で祖父の存在
 が大きくなっていきました」。

こう話す赤井さんは、その難し
 さや奥深さを実感することで、生
 涯仕立て職人を貫いた祖父の妻さ
 を改めて知ったのだろう。赤井さ
 んは工房に祖父の写真を飾り、祖
 父が手掛けた紳士服を大切に保
 管している。

仕立屋スピリットが良品を生む

一口にジーンズと言っても、その
 世界は広くて深い。一般の人には
 量販店で気軽に購入できる既製



品のイメージが強いかもしれない
 が、ジーンズの愛好家は細部にまで
 こだわり、職人もそれに応える。
 ジーンズそのもののシルエット、縫い
 方や糸による見た目の違いやフィッ
 ト感の違い、ポケットの形、ボタンや
 リベットのデザインと打ち方、洗濯
 をしたときの色落ちの雰囲気など
 など、どの部分を取っても普段履い
 ているときは気が付かない詳しい
 話が赤井さんの口から飛び出して
 きて、好奇心を掻き立てられる。

ジーンズは実用品であり、機能
 性の高さを見た目の良さを両立さ
 せることが必要だと赤井さんは考
 えている。それをよく表しているの
 が素材の選択だ。まず生地につい
 て。ジーンズ生地は岡山県が主産
 地だが、生産者によって特性がか
 なり異なるという。赤井さんは数
 ある生地屋の中から、自分の理想
 に叶う生地を作っている一社のも
 のを仕入れている。特徴は、柔らか
 くて履き心地がよく、かつ丈夫で
 あること。そして見た目は、色落ち
 したとき生地の表面に入る縦筋に
 繊細さを感じるという。

また、糸もこだわりのポイント
 だ。多くのジーンズメーカーでは縫

製にポリエステル製の糸を用いるが、赤井さんは綿糸を用いる。その理由は、綿糸だと生地と一緒に色落ちするので、履き続けてジーンズがいい感じの風合いになってきたときでも、糸で雰囲気損なわれないうから。ポリエステルよりも綿糸のほうがやや切れやすいが、もし糸が切れても生地に残り、デザインが複雑になって味わいが増すそう。ジーンズは履き続けることによって、フィット感も風合いもどんどん良くなっていく」と赤井さんは言うが、その良さは細部にまで徹底して気を配る作り手の技術、センス、そして誠意によってもたらされるのである。

ジーンズはアメリカの伝統であり、デザインするときは古いジーンズの写真を参考にすることが多いという。「時代の流れで切り捨てられていったものには、現代のデザイナーに活かせるものが多いんですよ。歴史の発掘をしているような感覚です」。赤井さんが作る格好良いジーンズには、祖父や先人への敬意が込められているのだ。

流行は変わっても、受け継がれる精神は変わらない。

